

京都大学	博士（教育学）	氏名	永山 智之
論文題目	二者状況と三者状況から見た心的世界とコンバインド・セラピー —対人恐怖の変化と発達障害をめぐる現代心理療法の可能性—		
（論文内容の要旨） 本研究では、二者状況と三者状況における心的世界とコンバインド・セラピーについて、現代日本で対人恐怖が変化し、発達障害が問題となっていることに注目して探究した。 序章では、二者状況と三者状況の現代的意義について、わが国の社会の変化に伴う青少年を中心とした対象関係の変化、対人恐怖の変化と発達障害の問題、病態水準から主体への観点の移行から論じた。そして、現代では従来の個人療法からの技法上の変更と共に、集団療法の活用が重要となってきたことを述べた。 第Ⅰ部は、第1章から第3章までからなり、二者／三者状況から見た心的世界に関する基礎研究である。 第1章では、二者状況と三者状況の体験の一般的傾向に関して大学生を対象に質問紙調査を通して探った。その結果、三者状況では場に対する意識が強調され、対人関係の感覚は二者状況を基本としており、三者状況は発展型として捉えられた。 第2章では、二者状況と三者状況における体験に関して大学生を対象に実験を行い、対人恐怖・現代型対人恐怖とされるふれ合い恐怖・自閉症スペクトラムの独自の影響を探った。対人恐怖的心性が高いと三者状況で、ふれ合い恐怖的心性が高いと二者状況で困難な状態となり、自閉症スペクトラムが高いといずれの状況でも体験が「足りない」ことでの困難が示唆された。対人恐怖的心性の高い事例には二人称の他者の求める役割に、ふれ合い恐怖的心性の高い事例には場における役割に同一化する防衛的対象関係が見出せた。他方、自閉症スペクトラム傾向の高い事例には「情報」は得るが、他者に対して主体的に関与できないという困難が生じていたと言え、情報処理や主体の機能の問題が想定された。最後に、対人恐怖を出発点とした時にふれ合い恐怖と自閉症スペクトラムに見出せる体験の「変化」の方向性について論じると共に、臨床実践への援用可能性について考察した。 第3章では、対人恐怖・ふれ合い恐怖の臨床知見と自閉症スペクトラム障害当事者への友人関係に関するインタビュー調査から、臨床群の二者状況と三者状況における体験について検討した。自閉症スペクトラム障害の事例では、具体的な受け止め手との1対1のつながりが必要条件となり、それがあれば三者状況では「居場所の分からなさ」を感じるものの「緩いつながり」が持てることが示された。対人恐怖では二者関係から三者関係に橋渡すためにセラピストが支えとなること、ふれあい恐怖では緩やかな集団での関係や横並びの二者での関係を用いることの意義が示唆された。 第Ⅱ部は、上記のような第Ⅰ部での基礎研究を踏まえ、コンバインド・セラピーの展開を論考する事例研究を行う第4章から第7章までからなる。 第4章では、対人恐怖と発達障害に対する個人療法と集団療法を併用するアプローチに関する研究を概観した。まず、対人恐怖では二者関係から三者関係への展開が治療機序となるのに対して、現代型対人恐怖・発達障害では二者状況と三者状況にまなごしを向ける意義が論じられ、具体的・日常的な設定や集団の中でペアを作り、クライアントをセラピスト以外の他者につなぐことの治療的な意義が示唆された。 第5章では、個人療法とグループ活動を通じた、現代型対人恐怖の青年との事例を検討した。ツールやグループ活動という第三項を導入することで展開し、様々な現実や他者とのふれ合いがクライアントの中身を作り、現実場面と深層の通路ができた			

言える。個人療法とグループ活動をセラピストと共に行き来することで、三者関係的世界に橋渡しされて二者関係的世界が深化し、内面化に至ることが示された。

第6章では、個人療法とグループ活動を通した、自閉症スペクトラム障害の青年との事例を検討した。クライアントが迫った「究極の選択」にセラピストが答え、具体的・日常的な次元でセラピストが主体的に関与する中で、クライアントは自らも様々な選択をして現実と向き合う力を育んだ。加えて、「内」と「外」の境界を作るようにセラピストが関わる中で主体を確立し、連動して社会性も発達した。個人療法とグループ活動をセラピストと共に行き来することで、二者関係的世界と三者関係的世界の分化と統合がなされたと言える。

第7章では、第5章と第6章の事例の治療機序を比較した上で、現代型対人恐怖の事例から個人空間を作り出す構造の意義を、自閉症スペクトラム障害の事例から2つの治療構造の境界の意義を論じた。さらに、自閉症スペクトラム障害の事例に対して、グループ活動で二者状況と三者状況を構造として作り出し、セラピストの観察や感覚をぶつけたり、行動レベルでの強引な関わりを行ったりすることによって動かすアプローチを示した。

そして、終章では、個人療法とグループ活動のコンバインド・セラピーの持つ現代的意義について論じた。ふれ合い恐怖や自閉症スペクトラムの心的世界と類似した特徴が現代日本の対人関係やネット社会に見出された。これを踏まえ、現代青年に対して、まず直接二者状況と三者以上の集団状況を行き来する治療構造を設定する所から始まる治療的展開について論じ、セラピストが二者関係的世界と三者関係的世界の行き来を助けることの意義が示された。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、わが国における二十世紀半ばから今日にまで至る「時代精神の病」の変遷を、対人恐怖の変化と発達障害への注目という現象から捉え直し、そこに見られる二者／三者状況における他者との関係のもち方の違いを、量的研究と質的研究、双方のアプローチによって明らかにすることで、現代社会において真に求められる新たな心理療法の姿を浮かび上がらせることを試みたものである。

このような研究の方向性は、心理療法それ自体を、固定した一つのテクニックとしてではなく、あくまでも眼前にある生きた対象によって変えられてゆくべきものとして捉えている点において高く評価できる。

序章では、古典的な神経症としての対人恐怖や現代的な対人恐怖としてのふれ合い恐怖、さらには対人関係やコミュニケーションの障害としての発達障害が相互にかかわり合いながら、現代における日本的心性のあり方を指し示しており、二者／三者状況という観点は、これらの症状・病態を比較する際の重要な手がかりとなることが示されている。ここには、心理療法が、従来の精神分析で重視されていた内的な「対象関係」を離れて、より具体的な他者との関係としての「対人状況」に焦点を移す必要があることも含意されており、この点において、「対人状況」という観点をもつことは、被災者支援やスクールカウンセリング等の現代社会における心理療法家に対する様々な具体的な要請のなかで、ともすれば「アームチェア・サイコセラピスト」と揶揄されることもあった古い心理療法家の姿勢の修正、及び改変に寄与するものと思われた。

「基礎研究」と題された第Ⅰ部は、三章からなり、第1章では、質問紙と実験を通して、二者／三者状況の体験の違いが明らかにされ、さらに第2章では、そのような二者／三者状況における体験に関する非臨床群を対象とした調査を通じて、対人恐怖的心性・ふれ合い恐怖的心性・発達障害的心性がそれぞれその体験にどのように関わるのかが論じられ、加えて第3章では、自閉症スペクトラム障害と診断を受けた当事者8名に対して、第2章で用いられた手法を援用して、二者／三者状況の体験についての調査が行われている。これらの三つの研究から見出された、対人関係の感覚は二者状況を基本としており、三者状況はそこからの発展型であることや、対人恐怖的心性・ふれ合い恐怖的心性・発達障害的心性各々が及ぼす対人状況における体験への影響、さらには、自閉症スペクトラム障害をもつ個人が三者状況で体験する困難等は、心理療法家がすでに臨床実践を通して論じている事柄ではあるが、これらを、質問紙法、実験法、描画法、インタビュー法等の多様な研究法を用いた、非臨床群・臨床群双方に対する調査から実証しえたことには大きな学問的意義がある。

第Ⅱ部は、上記のような「基礎研究」を踏まえた「事例研究」であり、ふれ合い恐怖の事例や自閉症スペクトラムと診断された事例に対する「コンバインド・セラピー」実践の意義を論じた四つの章からなる。第4章では、対人恐怖と発達障害に対する個人療法と集団療法を併用するアプローチに関する研究を概観した上で、具体的・日常的な設定や集団のなかでペアを作り、クライアントをセラピスト以外の他者につなぐことの治療的意義が指摘される。第5章と第6章はそれぞれ、自験二例についての事例研究であり、第7章では、前二章で取り上げた事例の比較検討から、それぞれの治療機序が論じられる。このように、第Ⅱ部では、クライアントの二者状況から三者状況への移行を促進する機能をもつ心理療法の形態として、同一のセラピストが個人療法もグループ活動も担当する「コンバインド・セラピー」が、具体的な対人状況に困難を抱えるふれ合い恐怖や自閉症スペクトラム障害の事例に奏功しうることが、著者の自験例を通して明らかにされており、その臨床的な意義は非常に高い。

終章では、このような個人療法とグループ活動の「コンバインド・セラピー」が、新しい心理療法の形態として、現代における個人と社会に対してどのような意味をも

ちうるのかが論じられている。先にも述べたように、心理療法家は今日、個室に閉じこもることを止め、様々な形でアウトリーチすることを求められているが、そのあり方を論じる際、このような「コンバインド・セラピー」の実践やその根底にある「対象関係」ならぬ「対人状況」への着目は、今後ますます大きな意味をもつだろう。

口頭試問では、数量的なデータを扱う際のより繊細な態度の必要性、取り上げられた事例の自閉症スペクトラム障害という診断の当否、面接経過のなかで報告された夢の解釈の妥当性等について議論された。しかしながら、これらは、本論文の価値をいささかも損なうものではなく、むしろ臨床心理学領域の研究者、そして心理臨床家としての著者の今後のさらなる発展のための課題とされるべきものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 28 年 3 月 2 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降